

デーリー東北 2022年(令和4年)6月28日(火曜日) (21)

私見 Tuesday 創見

する商売なのである。八百屋は『伊達娘恋・緋蓮子』、すゝ屋は『義経千本桜』などがある。作品に登場する衣装に着目すると、衣にまつわる

歴史の一面が見えてくるのが面白い。例えば、酒屋であれば『妹背山婦女庭訓』。道行恋の芋環は、『古事記』などに記される奈良の三輪山伝説を原典とする。芋環とは紡いだ麻糸を環のように巻きつけたもの。通つてくる男の衣服に付けておいた麻糸をたどると、神の社に行きついたという神婚話である。この時の糸巻きに糸が三勾残っていたことが三輪という地名の由来とも。

文案では登場人物の名前となる。三輪の杉酒屋の娘お三輪は、恋仲の男のもとへ毎晩別な女が忍んでくると知り、それを確かめようとする。逃げた女の袂に芋環の糸をたどると、お三輪も慌てて男の着物の裾に白糸を縫い付け、2人の後を追うの

衣の効果



川守田礼子

八戸工業大 感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文案などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱(ひし)刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文案はちのへ塾主宰。

2人のペアルックはまだある。次の釣船三福内の段では、それぞれ茶色と藍色の格子柄の綿浴衣を着ている。縦横の線の幅やマス目のサイズが大きな格子柄は、正式には弁慶格と呼ばれるが、この芝居が大評判となると、団七が

着る柄を「団七縞」と呼び流行となった(当時格子模様もしまと称した)。大胆な格子柄は団七の荒ぶる気質を表している。『近世のシマ格子 着るものと社会』によれば、水辺に浮かぶ陸地を指す地形語シマがなぜ直線模様の名称になったのか、その起点を「嶋織物」としている。

最後に、今年、国立劇場再整備計画がまとまり「未来へつなぐ国立劇場プロジェクト」が開始した。国立劇場・国立演芸場は、老朽化による建て替えのため、2023年10月末に休館する。これまでさよなら公演が開催され、リニューアルオープンは29年秋とのこと。新型コロナウイルスの状況に十分に目を配りながら、初代国立劇場の見納めをしたいものだ。

八百屋、酒屋、油屋、すし屋と聞いて、何を連想するだろうか。これらはいずれも人形浄瑠璃文案や歌舞伎の演目に登場

祭花鑑』がある。大坂高津宮の夏祭りを背景に、侠客の心意気を描いたものだが、主人公の男たてを表す小道具として衣装が用いられている。まず、住吉鳥居前の段で主人公の団七郎兵衛と、団七と義兄弟の縁を結ぶ一寸徳兵衛が着ているのが首拔と称される浴衣。白地に、肩から胸、背中にかけて大きな一つ模様を染め抜いた大胆な模様で、夏祭りの高揚とげんかつ早い2人のキャラクターと映り合う、舞台でひときわ目立つ衣装だ。

人形浄瑠璃文案の衣装考

である。麻糸が3人の恋を結ぶ小道具となり、途中でぶつ切り切れる白糸がお三輪の悲劇的な結末を暗示する。さて、夏狂言の代表作に『夏

室町時代の嶋織物には非難の対象で、当時の書物に下賤者が着るもの、公的な場では着ていけないと記されている。その理由は嶋織物には危険な要素があり異質で奇異なものには排除すべきだからである。しかし、縞柄は江戸時代にかけて爆発的に普及する。本来、警戒すべき模様であり凶暴な力を秘めた外来の文様を、日本人はさまざまアレンジで消化することで凶暴を

なだめすかして飼いならしたと『縞のミステリー』にある。江戸小紋にある千筋万筋のように遠目にはもはや縞に見えない縞柄を進化させ、なじませたのだ。現代の縞柄、格子柄にそのような感覚を感じ取ることはないが、観劇を通して衣装に表れる染織史の一端に触れるのが楽しみでもある。

最後になるが、今年、国立劇場再整備計画がまとまり「未来へつなぐ国立劇場プロジェクト」が開始した。国立劇場・国立演芸場は、老朽化による建て替えのため、2023年10月末に休館する。これまでさよなら公演が開催され、リニューアルオープンは29年秋とのこと。新型コロナウイルスの状況に十分に目を配りながら、初代国立劇場の見納めをしたいものだ。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。